ピストルがほしい

両角忘夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ピストルがほしい

【Ｎコード】
Ｎ１６９５Ａ

【作者名】
両角忘夜

【あらすじ】
幼なじみの高木くんと、噴水のある公園で再会したあたし。手に入れたピストルで、むかし自分をイジメた奴らを殺したい、と語る高木くんに、あたしは何となく、一杯のうどんを食べてもらいたいと思う。

第一話　高木くん

二歳年上の高木くんとは、彼が中学生になるまでよく一緒に遊んだ。高木くんの家とあたしの家は向かい合わせにあり、間の道は行き止まりになっていたから車が入る心配もない。しゃがんで、チョークで絵を描いても平気だった。

アスファルトに空想の世界を広げ、互いの陣地を争う。

「キューン。ダダダダッ」。そう言って、高木くんは攻めてきた。彼の想像の国にはロボットや戦車がたくさんあったが、あたしの国には花と動物ばかり。それでも、あたしたちは勇敢に戦った。ライオンが死に、熊が死に、キリンが死に、象が死んだ。戦争が終わると、あたしは死んだ動物たちのお墓をチョークで描いた。高木くんも何か、葬儀の真似ごとをしていた。

小学校の近くに神社があり、境内の奥に小さな公園があった。近所の仲間たちと、あたしたちはそこでもよく遊んだ。

公園の周りは暗い森のような木々に囲まれていたから、ボールが飛んでいくと捜し出すのに苦労した。

隠れんぼうをすると、鬼を残し、みんな本当に消えてしまう。普通は鬼役の子が寂しくなり降参して終わる。ところが高木くんが鬼になると、「ババババ、ギューン」と独りで銃声を口真似し戦争ごっこをしているので、隠れ役の方が寂しくなって出てきてしまう。

今は公園の周りは伐採され、花壇や駐車場になっている。遊具も一新され明るくなった公園に、子供たちの隠れ場所はもうない。

たまに高木くんの部屋にも遊びに行った。

あたしたちはお互い独りっ子で、両親の帰りが遅い。一階の居間には、お菓子やジュース、カップ麺が揃っていたから、適当に選んで二階に上がる。高木くんの部屋の本棚には、残酷なホラー漫画がいっぱいあったから、あたしはドキドキしながらそれを読んだ。

赤いエレキギターがあり、小学生の仲間でギターを持っているのは

高木くんだけだった。あたしが漫画を読む間、高木くんはギターで下手な練習をしていることが多かった。

そんな高木くんも、中学生になってからあたしを遠ざけるようになった。

向かいの家だから、玄関先でよく顔を合わせる。

「おはよ」

あたしが挨拶しても、詰め襟の制服を着た高木くんは冷たく、無言で目を逸らしたりした。

高木くんがイジメられていると知ったのは、彼が中学生になって半年後の秋だった。

両親の帰宅が遅い高木くんの家に、同級生や先輩が出入りするようになった。最初の異変は、ネックが折れた赤いギターが、ベランダに野ざらしになっていたことだった。彼の部屋のベランダは、あたしの家の玄関からよく見える。ギターをあんなふうにして、親に怒られないのだろうかと思った。

冬がきて寒風がすさぶ頃、今度は高木くん自身が、薄着でベランダに座っているのを見るようになった。

あたしが見上げていることに気付くと、高木くんは怒った顔をして立ち上がり、「おーい。もう開けてくれーッ」とガラスを叩いて叫んだ。それで開けてもらえることもあったし、いつまでも部屋に入れてもらえないこともあった。

ある朝、家を出たところで、あたしと高木くんはばったり会った。

あたしは思い切って訊いた。

「高木くん。イジメられてるでしょ」

「しらねえ」。高木くんは目を逸らした。

「ギター、壊れされたでしょ」

「るっせえよ」

怒ったのか、乱暴に肩を突き飛ばした。よろけて尻餅をつく。転ん

だあたしを残し、高木くんは行ってしまった。
翌日、学校から帰ってくると、高木くんの家の前に１０人くらいの中学生がたむろして、大声で叫んだり、玄関のドアを蹴ったりしていた。
「タッカギー。おーい」
「出てこい。殺すぞォ」
あたしは怖くて後戻りし、離れたブロック塀の陰に隠れて見ていた。しばらくすると高木くんが玄関から出てきた。たちまちみんなに囲まれ、殴られる。それから中に連れ込まれた。
あたしは家に帰ったが、隣の様子が気になり、勉強するのも、テレビをつけることも出来なかった。大人を呼んで助けるべきだろうか。けれど、あたしは何もできなかった。
夜になった。両親はまだ帰らない。あたしは電気もつけないで、部屋のなかでじっとしていた。
救急車のサイレンが近づいて、家の前に止まった。窓から覗くと、救急隊員が高木くんの家に入って行った。門の前に警察官が立ち、二人の中学生が無表情で立っている。他の奴らは帰ってしまったのか。
あたしは裸足のまま玄関から飛び出した。そこで転びそうになったのを、警察官に支えられた。
目の前にいる中学生を睨みつけた。何か言いたかったが言葉が出ない。震えながら、相手の顔を指差した。
中学生はうろたえ、「……まだ、死んでねえんだ」と言い訳して横を向いた。
救急車は走り去り、母が帰ってきたので、あたしは家に戻された。続けて帰宅した父も気が動転したのか、早口で母と何かを話している。あたしは二人の言っていることがわからない。深刻ぶって、関係ないことを喋っているように思えた。
それから二週間して高木くんは退院したが、顔を合わせる間もなく、一家はどこかへ引っ越してしまった。

第二話　ピストルとうどん

高校を卒業し、あたしは大学には進学せず、駅前にあるうどん屋でアルバイトを始めた。友人の春香の実家で、彼女は店を継ぐつもりはなく、美容師の専門学校に通っている。家に帰っても手伝わず、すぐ二階に上がってしまうから、母親はよく文句を言っていた。
バイトが終わると、あたしは帰る前に二階に上がり、春香と話して帰る。机には首から上のマネキンが置かれ、初めて見たときは驚いた。
「うどん屋なんてダサい。絶対やらないわ」
そう言いながら、彼女はマネキンの髪をとかしていた。
「確かにダサいかもしれないけど、親子で働けるんだし、よくない？」
「それが一番ヤなんだよ。あーもしよかったら、あんたウチの子になるといいよ。母ちゃんも喜ぶ」
あたしは少し考えて、「そうしよっかなあ」
「まじー。あんたも変わり者だねえ」
「だって、あたし春香みたいにやりたいことないもん」
「飲食店でも、もっとカッコイイのやんなよ。和食はダメよ」
適当な話をして、あたしたちは別れた。
自転車で夜道を飛ばしながら、春香は美容師になれるだろうかと考えた。なれるかもしれないし、なれないかもしれない。あたしはうどん屋になるのだろうか。なるかもしれないし、なれないかもしれない。
それから、高木くんのことを思い出す。高木くんはどんな大人になるんだろう。イメージが沸かない。
玄関前に自転車を停め、入る前に振り返って向かいの家を見る。
高木くんたちの家は、引っ越してからすぐに取り壊され、新しく白い壁のツーバイフォーの家が建った。かわいらしい男の子二人と、

上品なお婆さんと、ゴールデンレトリバーが同居する明るい家庭。
玄関には、手入れされた鉢植えが並べられている。
それに比べて、高木くんの家は暗かった。そして、あたしの家は今でも暗い。
両親とはうまく話せない。だから家にいるより、うどん屋で働いている方がラクだった。ラクだけど、うどん屋になりたいかはわからなかった。彼と再会するまでは。

高木くんと再会したのは、駅の反対側の公園のベンチで、バイト前の暇潰しをしていたときだった。
あたしは高木くんの影響もあって、ホラー漫画にハマッていた。その日も古本屋で買ったグロテスクなホラー漫画を読んでいたが、ふと顔を上げると、噴水の向こうの離れたベンチに高木くんが座っていた。
声をかけようかと迷っていると、知らない女の子が歩いてきて彼の横に座ったのでやめた。
ところが高木くんはあたしの存在に気付いていたようで、チラチラッと数回こちらを見てから立ち上がり、二人で歩いてきた。
「……おっす。久しぶり」。高木くんはそう言い、続けて女の子を紹介した。「俺たち、付き合ってるんだ」
女の子はペコリと頭を下げた。ストレートの長い髪が揺れる。
あたしたちは並んで一つのベンチに腰掛けた。幼なじみの二人に挟まれ、女の子は窮屈そうだった。
高木くんはあたしの漫画に気付き、「まだそんなの読んでんだ」と笑った。
「高木くんは、今は何読んでるの」。あたしは訊ねた。
「もう何も読まねえよ」。高木くんは答えた。
「いま、どこ住んでるの。近く？」
「ああ。親んとこ出て、また戻ってきた。部屋借りて、こいつと一

緒に住んでる」
あたしは不思議で、「あんな目に遭ったのに、どうしてまた帰ってきたの」と訊ねた。
高木くんは女の子に、「あのさあ俺、中学の頃イジメられて、殺されかけたんだ」と説明した。
それからあたしの顔を見てニヤリと笑い、「実は俺、知り合いのヤクザからピストル買ったの。それで、今度はあいつら殺してやろうと思ってる。ガーン、ビシューン」
高木くんは噴水に向かって撃つ真似をした。
「ビューン、ガキーン。ズーン、ガガガ」
公園に響く銃声を、あたしは黙って聞いていた。女の子も、一言も口を利かずに聞いている。
一通り撃つ真似をしてから、高木くんは言った。
「でもさ、俺が人殺して捕まると、こいつ独りぼっちになっちゃうの」
それから高木くんは下を向き、手に握った想像のピストルの感触を確かめているようだった。
低い声で、「こいつ、俺たちより、ずっと可哀相な子なんだ」と言う。
「そうなんだ」。あたしは曖昧に応えた。
バイトの時間が近づいてきた。自転車に乗って、うどん屋に行かなければいけない。
あたしは立ち上がって、二人の方に向き直る。
「よかったら、駅の反対側の、レンタルビデオ屋の隣にあるうどん屋に食べにきて」
「なんで？」
「あたし、そこでバイトしてるの」
「へえー。俺はたまに解体屋でバイトしてるけど」
「あのさ、あたし、今はうどんに救われてるみたい。あったまるし、……美味しいよ」

あたしの言い方が可笑しかったのか、高木くんは腹を抱えて笑ったが、女の子は表情を崩さなかった。
ホラー漫画を自転車の籠にほうり込み、顔を上げると青い空が綺麗だった。あたしたちは手を振って別れた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1695a/

ピストルがほしい

2010年10月10日03時26分発行